



二卷
初右

玉緒線分爾卷

○夫の結びハ紐流の右ハ云云。かゝるくゞさゞまをらふかゆゑあや

△本ぞのや何の結びハ云云。その結びハ云云。ハた小げ小其理り然る

て、その結びハ云ハ云の截断もて居るも有り。或は云云。な

ふあまこの語多ぞのや何ハ云云。かゝるくゞさゞまをらふかゆゑあや

まび居るも有り。或ハ云云。掛らざる時ハ云云。或ハ云云。など受けされ

躰も語をなざるに似させなど。受ても後其詞きるハ云云。

治まるもあはれを本にこそ。と云辞方てそれ小意る時ハ云云。

云云。能くもどそ。小て即ち截断也。云云。と云ガそ候よてヤ云云。

截断の意ハ云云。と云ひを云云。に同じにたり。云云。ハ即ち云云。



和
365
3

截きて止れるに同じ越となる、但、うるさるれど、初字は為小狩云ひ、
 玉緒一毫トホみゆうトをよトおりトどトと有如く、古文よもこトこトこト
 掛りの云トて截断となれど、當意なる其云をも、狩むトどトと云ふ
 次へ云トて、まトもトおトりト有ハ、又其格の有トと、尔まトばトとてなく、
 れよりおトて、爰に云趣をバ勿ト誤りそめ、又彼狩云へ連トくトハ
 引トつトるトおトりトなトども、トのトやト何トにトおトりトてトハ、やトがトてト截断トてト此ト亦ト引トつトるト
 云ひトおトりトと云へる、トのト截断ト云と曰言になら、たとへバ人の歩トこトて
 未トどト止トるとハ、なきをも、後より、帯トを引トくトる者、有ハ、トのト引トくトる
 かトして行トく、徒トを引トく、やトがトて其処トに立トるが如し、詞の未トど止トまトす
 次へ移りぬべきも、トのトやト何ト又トにト引トきトそれにかりてハ、やトがトてトそトこ

一、あて止り、トを本末の結びと云ふ、何をも截断云と、初トて治
 まるなり、然にいとゆるを、トのト結びトといつるハ、自稱その詞、おのれ
 と治り止まれる、トのトよりト之をきトくト詞と云、トが友鏡トハ、トの
 易うらん、トのト名目を設りて、彼將ト然人トと云ふ、トのト已ト然トと
 云ひ、トのト用ト云へ連トく、トのト言へ連トくなど、玉緒ハ、トのト衛ト小云るを、おのく、二字
 づトて、其を差別する、トのト詞と云、限りをバ截断云と云へる
 かり、其截断、トのト連、トのト言も已然言も、皆本の辞、トのトより引か
 りの趣、トのト皆轉して截断云とならなり、トのト云、トのト云、トのト截断
 とも、トのトハ、トのト己れとにまれ、トのトひトくトれてト小トまトれ、トのトかトくトり
 こトと止る、トのト是、トのト初トる、トのトやトし、トのト止り治り截断を

△此てをハ思ひ出せよ。「そもすえぎ」とありねど 己有本_二依へよりハ思ひ出せん。」と

有方に从へバ殊小てをの辞かり易き極まりさるる本も昔に有くたなり、

○わらき_てを_ハ木とをへ_ハつと思へむやが例又なぐ_ハに_ハめて_ハえ_ハん

△此ハ本_ハどをへ_ハどそ_ハん又ハへ_ハそ_ハま_ハ」など有べきさぬに思はる

さ_ハど_ハて_ハを_ハの_ハり_ハ未_ハ然_ハを_ハ云_ハと_ハ云_ハ説_ハと_ハあり_ハ難_ハき_ハなり_ハは_ハ是_ハよ_ハ

りて_ハあ_ハ小_ハ此_ハ方_ハの_ハて_ハハ_ハ彼_ハな_ハが_ハて_ハそ_ハ妹_ハ有_ハの_ハ山_ハの中_ハ小_ハお_ハつ_ハる_ハ一_ハの

川_ハの_ハよう_ハや_ハその_ハ中_ハへ_ハ云_ハへ_ハる_ハ奇_ハの_ハて_ハと_ハ同_ハ小_ハ又_ハて_ハて_ハり_ハを_ハ

將_ハ然_ハと_ハハ_ハみ_ハる_ハま_ハづ_ハく_ハ、「彼_ハの_ハ活_ハの_ハき_ハま_ハち_ハひ_ハみ_ハの_ハ如_ハき_ハ」連_ハ用_ハ言_ハと_ハして_ハそ_ハれ_ハ文_ハた_ハる_ハた_ハれ_ハを

此_ハハ_ハん_ハん_ハ溜_ハる_ハま_ハづ_ハき_ハ例_ハの_ハた_ハり_ハと_ハ云_ハへ_ハき_ハよ_ハハ_ハ非_ハる_ハ次_ハ一_ハ首_ハの_ハ趣_ハき_ハ然_ハ見

て_ハす_ハゆ_ハる_ハハ_ハら_ハる_ハむ_ハや_ハ是_ハを_ハバ_ハ彼_ハ或_ハ説_ハ一_ハ惑_ハひ_ハて_ハた_ハれ_ハた_ハん_ハと_ハ思_ハひ

あやまらるゝ勿き、

○みちの_ハふ_ハ者_ハと_ハい_ハふ_ハあ_ハる_ハ名_ハ取_ハ川_ハさ_ハき_ハさ_ハる_ハり_ハて_ハを_ハく_ハり_ハる_ハを

△是_ハも_ハく_ハり_ハかり_ハる_ハと_ハあ_ハれ_ハバ_ハさ_ハき_ハ名_ハ取_ハて_ハを_ハの_ハか_ハる_ハ処_ハ覺_ハ来_ハた_ハき_ハ極

よ_ハて_ハさ_ハき_ハさ_ハる_ハり_ハた_ハま_ハと_ハ又_ハれ_ハバ_ハよ_ハれ_ハか_ハく_ハよ_ハし_ハと_ハさ_ハる_ハ思_ハを_ハれ_ハて

さ_ハハ_ハ彼_ハて_ハを_ハよ_ハハ_ハた_ハる_ハを_ハた_ハれた_ハの_ハ二_ハ者_ハと_ハあ_ハそ_ハ極_ハる_ハ考_ハを_ハ袖_ハう_ハつ_ハて_ハさ_ハ

めて_ハを_ハ「ま_ハど_ハを_ハも_ハた_ハれ_ハを_ハの_ハ言_ハあり_ハと_ハ云_ハ説_ハも_ハ傳_ハも_ハて_ハる_ハ事_ハと_ハや_ハう_ハに_ハ思

ふ_ハ人_ハも_ハ有_ハん_ハう_ハた_ハれ_ハど_ハ猶_ハあ_ハる_ハよ_ハハ_ハら_ハる_ハと_ハ位_ハ又_ハ或_ハハ_ハ此_ハさ_ハき_ハさ_ハる_ハり_ハて_ハさ_ハく

る_ハかり_ハる_ハ定_ハの_ハお_ハよ_ハて_ハハ_ハて_ハさ_ハハ_ハそ_ハて_ハお_ハて_ハる_ハり_ハを_ハバ_ハ此_ハり_ハを_ハハ_ハつ_ハね

の_ハり_ハ定_ハと_ハハ_ハ異_ハよ_ハて_ハら_ハん_ハと_ハ云_ハ説_ハを_ハく_ハよ_ハて_ハ推_ハ量_ハの_ハり_ハ定_ハた_ハり_ハと_ハ云_ハべき_ハ極

よ_ハも_ハす_ハゆ_ハめ_ハり_ハ、_ハ即_ハち_ハ此_ハ書_ハ六_ハ三_ハ小_ハお_ハて_ハか_ハる_ハり_ハ定_ハと_ハそ_ハ其_ハ一_ハ種_ハの_ハ例_ハを_ハ出_ハし

書きかめつらうハ邪を致た思えろくたるを、
活雜(七二)の 漢籍訓小欲聞を
来に合考
ど云る類多うも原く所の語例有てに也、
漢籍訓のハ別小和読
語路撤ふつむるべし

公

○下にまゝいゝをさるハ云

△上小云へる如く未然を云むの末ハまゝと云ての多う、意よりその
理りゆれど然りとてまゝ小邪にありて、爰小引万十五の如くむう
りこひんとかめてまゝませむの末を、妹をむんぼぞりるべうりゆれと
云へるハいゝゆるべしと云詞の活きのべうりそ應たるなり、ませむの
はハ上かス

る如く、時然云を受る普通の例のむなるを然るむの末ハまゝとて、
んまゝいゝとく結ぶ例なること、ませむの五丁已下考て受るべし、

○ぬ尔のさの終む

△口然言をむと受ると、連躰云をよと受るとなれば、かゝるぬの

同

けぢめ有きハ定まる理りなれど、已然云をむと受るがやうく連躰
をよと受ると、言通ふささたる其数例少うぬ詞づひなり、万葉十
巻万葉一至白雲のさふもいゝと思へたあとの志げく是ハおも
ふはなり、又四十七、ま今ハなるんと麻氏麻かともみ松ひきカハ
へよつはハかまつの小たり、又貴之系か衣新くと年なれた人
ハかくこそありまさりるは年ありるあり、曰書は保きやどり
らもえ年毎よ花のゆはははくさりるはハありる、又み人もこ
ぬやどたれた様むももかさるむ今ぞちりるはありるあり、たり、羽怪
系に、ままえ志ぐ日毎ありやけたれこ人をえるありやく
こハありやくになり、近くハ古今表、まちまるあのまんくとあれハ

山ハ去もちくぬユルリコは「事」ナリ又月秋、秋を記さうしこれ
をバ「川」の山下とよみまうたうらん「あを」を「心」なりかれ
た凡ての活語どもの已然をを「文」するに、連射をを「文」する
と似通へる意の記多しといへんも可欤、七卷^三の條分見合べし、

九七

○毛

△毛小亦の字の意なる者、まさハだ小と云へるに大く、同じまをへる
るより、此外種々異あれど、まの字二つをまきて意得をべし、あつ
初うぬえルて「毛」を「引」る字の中「毛」も、新^七「毛」あつて云く
ろはおく「毛」みよ「毛」ぬ「心」の「毛」ハだこの意、其外の「毛」亦の意
のなりとす也、次々依られの「毛」と云へるを皆忘つて辨へるべし、万

染十^六「毛」が「毛」ありつる者「毛」流去而いもが「毛」本「毛」いゆき「毛」ぬれぬ、

毛らハだこの意なること殊^ナた「毛」なり、ぬれぬハ「毛」れ「毛」し「毛」の
意「毛」れ「毛」だ「毛」し「毛」し「毛」七卷

二十丁 小ぬうぬうをあま「毛」引るをみる「毛」ぬ、預^カふ意のぬうの上小

ハ多、此だこの意の「毛」者、されど「毛」むきに必然りとハ云難し、万十又

十^六「毛」せこハ「毛」ぬ「毛」こぬうとまらんを「毛」又^{十七丁}「毛」わする月八子と

出ぬう「毛」などの「毛」ハ「毛」ちつけ小だ「毛」なりとハ云ひが「毛」されどそ

れ「毛」云ひりてゆけバ「毛」ハ「毛」に「毛」ぬめり、

○「毛」をまぬる格より「毛」人の「毛」の「毛」のあつるへ、今「毛」○「毛」二つにて

さハと二つある格「毛」何「毛」何「毛」標「毛」今「毛」又「毛」加「毛」も「毛」人「毛」

思「毛」系「毛」り、於「毛」^{十七}「毛」水のおも「毛」ぬ「毛」く「毛」くも「毛」え「毛」る「毛」る「毛」紫の「毛」

百十右

や副漱きうらんうらるるあかぬと云へる如き是なり、亦くもはらふもを
おのころべー又美條三三 蟲雨鳥爾毛二これハありなりと云へる毛も、二つおくまなるなり
もく二つ云べきを、二つのもうてきうせらるなり、されどこハはくはく
などこハまじり夫なり、こゝて又これと似る勢も、ハ二つ有て、それ運る今二つの
も花をもをれる心をえよ向の山の神もさる
らんこれえををもく二つ云へるそらきり

上九

○人のさきのも

△千四のも、千五百のも、えせんきうせんとかくと全く日意こそ、せと
と書るよても有んう、さ思ハんと今うくハかむ又ハの形変もるな
ろとハ誰もあれると小て、即古き等の政是、彼をさるに、いんをいん
と書る類少う、ささのこ古うたなき板下か、めくけるこそ、今彫り

十

まきとある蜻蛉日記小ま、いんをんと書る処多うるなどより思ふ
ふんと今うくをいんとかきもあつらん由をも知べき小あうとや、おろ
づむのちも猶さならん、或云火焚すをいん、さ音をいん、さかろんハ、ともハ
り奈万之奈下巻に此
あつハ具さに云る、

○こてとかくま

△此とハ玉霰十七 小詳説あり、往き見べ、いそもせ小あうらふべくもいぬ
正行楠氏の詠れらんなど、被ハ
あそれなれと初句け小賤、
才のうりの契をいうて、政をいん

○序に云も人ある書に、よめいづと云ハこ小對して云となり、も
ハ亦字の意なりと云へるを、実にさるこかと同来一人ありき、これ
答へたらうハ、よめいづとわらふころハ、めやうと云この奇などこそ、は

と古今新釈に辨あり佳しさて又今考ふる小、女そと爰すうげ
 くるハ皆問うけて詞のきろくなるを、女外小つ、ぞとといつるが、其
 未小出る例の連射むむむのかりとなれるあり、百十八ヶ、い
一せるふせのうぞととて、う君がこせんと我をさむむ同十
 六たがそのうめの花ぞと久々の清き月よにこら敷すはら
 たり、女たがそのの奇と又合さるに、上のむむととぢめさるが
 も、君がといつるが、の結びハうも、むむハ終初句のいう
 より二句のぞとへとつて、其たがそのむぞおすいう一せる
 らぞとむむと初中後かりあふべきなり、さて女万十の奇、平に誰
 毛のの上に曾の脱なるべしといへる説小うつて出せり、さうハ十八卷なる伊
 可爾世流布勢能守良曾毛許己太久爾吉民我彌世武等和禮手等登牟流とある

曾毛に又合せてなり、されハ十卷なる毛を蕘のあやまりよて、梅もつとと誦べき故
 と云説ハ用らぬなり、ついでに云ん、万七右七行我許曾者とあるを、飛鳥井雅親御真蹟
 のを又つと、加納諸平の語るに思へハ、件の
 梅花毛なども、古なども尚求むべしとぞ、

十八卷

○ぞや

△新宮女卿素いう小ぞやあのりそれはと、うん小もあもさとわら
 万いたます、是らも同、女外小右の奇どもの如く、いづくいうあり
いう小あどいういへるぞや、ハ問うるとハきこえん、只云ぞといふ
居うらに、ををそへる小こそとすゆるなり、源氏帚木巻にさる
よよかきよぞととさめうのたるぞやと云へるなどを考ふべし、

□

○二つのぞ云例なきむがしよやうん、さうめがくまん

△新古今のう記人乃月ハ小そのゆくをぞとあひるがうららな

かめつくと云へるを小そはつひの俗語小なんぞの何ならん」といふと
 曰くて、**い**く**そ**の**そ**とハめとより又なりと云べく、つゝおがごとと云
 べくハあつて、そハ又別小一の語と云べくハ非る、又古今集に、い
 くそハくこころしと加えたり」とある、是も**幾許**若干を**幾十許**と
 云へるのの見もハせゆるやうなり、さてハ後撰十六なる「みこしそ
 いく**そ**」のよに身をへ」と云へるより、**葛城集**の「いく**そ**うらひ
 の子身ぬらん」と云へるまで六首の証可なるいくそハ、**葛城十**
 うらとよべきにやあゝん、

○**采女**戸のあととんぬばうりあをりせよわされぬ人乃かまふりぞとよ
 うつろもそあむく伝をれりか紙又ようへ**り**ぞとよ**首**れうらぬ

十九元

天

△此引出るる二首も、ゆぞハ**狩**おしをから心こそハ有なり、**玉**のをよ
 云よとせめををるるやとどハげ小おしをかりてやぶむさ「あはにい
 つくかたれるハ、その何やぶむさ」のなきあなり、こころの説々げ
 上げ小よくいせれととぞ**賞**ゆる、

○序に、ろびをえ、**秋**れぞハ大方連用云をえりたり、うらひのぞ
 くのりりぞなとを考ふべし、又辨云をもうく、**つ**りしめをあし「まご
 たりさそ**語**辞の」をもうく、**あ**ま小ゆそとふの如し、**秋**外小をを史
 て何とををそといつるハ古くハをさく、**又**當らば、**近**き世の人の身
 に、**誰**かに有たりん、**何**うつるようまきくいをめぞとらと有しを何
 どの書こそ、いかにぞあおえつて、**事**なり、但し**狩**よく考ふへし

同

廿七

○卷のあまや云人のあまるべく

△是ハ此決小ぎえも可くむえうねを往の流をりるやましやし

人のとく？」と例せられしとむとらふハ辨るべし人のあまるべく小木

へと上へるるとらろろからる上」二卷五の線分小云へるかめしべくを

の乃はひとハ云へりんん

同七

○の乃いさく異ある不ん

△凡てのハそのや何りかららう小てはもは小類ふにや近し

友後の固し様爰においても他考べし」の乃字をむもむの方へよせし下な割へかるべうとのせり

○の乃はひとハ云へりんん

△一卷十六小のの乃はひとハ云へりんん

廿七
二行

なめれど爰に出せる奇ハ首たに彼十六丁いなむのそよいひん

の乃はひとハ云へりんん

て意下きより卅五右乃は佐保山の乃はひとハ云へりんん

らぞぞや何小類つるのの乃はひとハ云へりんん

に思えらる珠と拾玉のハ尾の袖の乃はひとハ云へりんん

をづもしり云と云へる如く今も断りをまち一れ處なり採のの乃はひとハ云へりんん

よそ一首の乃はひとハ云へりんん

し加し我を忘らん下むものの乃はひとハ云へりんん

たらぬく一首の乃はひとハ云へりんん

のきろくハこれなりと何書^レの書どもに有^レて彼躬恒素^レたる「あぬ
 う日^レの」[○]とやうき[○]人[○]「久曾^レ天の川[○]方[○]たち[○]こ[○]へ[○]く[○]と云[○]へる[○]言
 も、[○]板[○]本[○]1[○]の[○]の[○]弦[○]び[○]こ[○]を[○]な[○]う[○]け[○]と[○]切[○]と[○]と云[○]ふ[○]べ[○]う[○]思[○]ひ[○]し[○]と[○]も[○]有[○]
 へ[○]と[○]然[○]な[○]う[○]こ[○]り[○]り[○]、[○]あ[○]め[○]と[○]ハ[○]活[○]く[○]ぬ[○]ま[○]て[○]共[○]有[○]ん[○]ハ[○]恒[○]の[○]有[○]ん[○]に[○]け[○]ん[○]、[○]こ[○]こ[○]こ[○]
 ろも[○]の[○]た[○]さ[○]ハ[○]ぬ[○]ま[○]た[○]る[○]思[○]ひ[○]糸[○]の[○]差[○]ぬ[○]こ[○]へ[○]や[○]ぬ[○]を[○]あ[○]る[○]こ[○]ん[○]これ[○]を
 人[○]正[○]き[○]こ[○]の[○]例[○]か[○]る、[○]但[○]し[○]此[○]分[○]の[○]一[○]卷[○]廿[○]二[○]丁[○]二[○]ハ[○]の[○]弦[○]び[○]の[○]例[○]に[○]出[○]せ[○]り、[○]其
 こ[○]の[○]う[○]の[○]う[○]り[○]分[○]に[○]審[○]に[○]せ[○]り、[○]こ[○]の[○]又[○]件[○]の[○]一[○]と[○]い[○]の[○]の[○]可[○]も、[○]弦[○]を
 人[○]を[○]の[○]弦[○]び[○]こ
 と云[○]ひ[○]え[○]ま[○]べ[○]、

廿若
三行

○古[○]ち[○]を[○]や[○]あ[○]る[○]糸[○]の[○]き[○]り[○]き[○]ん[○]は[○]く[○]か[○]る[○]云[○]ま
 △あ[○]は[○]、[○]引[○]り[○]き[○]ん[○]杖[○]衝[○]と[○]云[○]意[○]の[○]旁[○]な[○]れ[○]バ[○]杖[○]と[○]い[○]ふ[○]持[○]語[○]を[○]あ[○]く
 ち[○]て[○]ハ[○]た[○]く[○]凡[○]、[○]糸[○]の[○]き[○]り[○]き[○]ん[○]と[○]と[○]続[○]く[○]と[○]い[○]ふ[○]、[○]心[○]く[○]き[○]り[○]き[○]ん

「ハあ[○]ぬ[○]か[○]如[○]く[○]も[○]思[○]た[○]る[○]れ[○]ど[○]家[○]集[○]一[○]本[○]、[○]糸[○]や[○]き[○]り[○]き[○]ん[○]と[○]も
 あり[○]や[○]に[○]應[○]ぢ[○]れ[○]バ[○]必[○]き[○]り[○]なり[○]、[○]そ[○]れ[○]小[○]准[○]へ[○]る[○]に[○]、[○]爰[○]の[○]玉[○]緒[○]げ[○]小
 糸[○]毎[○]せ[○]り[○]の[○]と[○]ぞ[○]あ[○]ら[○]う[○]て[○]此[○]の[○]結[○]と[○]せ[○]ば[○]バ[○]を[○]裁[○]つ[○]る[○]た[○]、[○]一[○]卷[○]
 十六[○]、[○]小[○]巳[○]に[○]其[○]断[○]り[○]の[○]有[○]如[○]く[○]、[○]其[○]証[○]可[○]け[○]小[○]稀[○]成[○]と[○]なり[○]、[○]其[○]ま[○]れ[○]あ[○]る[○]
 を[○]こ[○]の[○]出[○]せ[○]る[○]中[○]、[○]小[○]拾[○]玉[○]の[○]を[○]ま[○]ぐ[○]引[○]る[○]ハ[○]の[○]ぶ[○]り[○]し[○]、[○]其[○]故[○]ハ[○]一[○]卷[○]
 の[○]処[○]小[○]、[○]引[○]を[○]と[○]めて[○]と[○]人[○]あ[○]る[○]故[○]何[○]や[○]免[○]茶[○]也[○]や[○]一[○]く[○]約[○]の[○]ま[○]と[○]さ
 め[○]ぶ[○]り[○]、[○]引[○]と[○]出[○]せ[○]る[○]に[○]双[○]ぶ[○]へ[○]き[○]な[○]れ[○]バ[○]な[○]り[○]ハ[○]こ[○]を[○]き[○]り[○]も[○]、[○]引[○]
 と[○]有[○]を[○]出[○]ま[○]ぐ[○]き[○]に[○]、[○]拾[○]玉[○]の[○]ハ[○]の[○]引[○]な[○]れ[○]バ[○]こ[○]ハ[○]彼[○]三[○]條[○]の[○]大[○]繩[○]の[○]例[○]小
 ハ[○]た[○]う[○]ひ[○]て[○]変[○]格[○]な[○]ど[○]云[○]べ[○]、[○]乃[○]上[○]、[○]小[○]、[○]全[○]糸[○]、[○]新[○]古[○]、[○]千[○]六[○]、[○]か[○]は[○]四[○]首
 の[○]引[○]の[○]例[○]を[○]奉[○]て[○]、[○]引[○]と[○]を[○]定[○]ま[○]れ[○]る[○]格[○]ハ[○]つ[○]と[○]云[○]ま[○]し[○]と[○]云[○]へ[○]る

文能大御心も云云この初なる二つの乃能ハ、恒の云ひぐさのなるを、
倭文能のハ、それとハ異うて、のぬくの意ののたう、女類中昔の假
名冊子小もあり、

○二つ共カ

十士大く、野云人書とこがの野云とぬの男よハ、あれう、神もいれさるれり、
△爰に引が二首の分たうのハ、同じ中うて、又二つ小分て示し、たき
ハ、バいよく、マエ易からん、其あハ、千載集のハ、よのつひの意と、
のりのの下へ意と云て、を入て、又、好も集のハ、こがののと云へ
るのりのを、やぐて、書と云語小、あうへて、まきなり、伊勢集に、
栂木の傍に

昨昨日の葉葉よりちりからん、栂の花雪の中のをとると、又
るべく、是らも同く、いと古き処、そハ、仏足石奇に、くをを、ハつひのも
あれど、まらひとの今の茶、まかり、をめた、かを、り、と、又、たるを
ど、狩ありぬべ、又、此のを、いへるに、その句を、互小、そあやなせる、あ
とも、宵、棠花物語、月宴小、古今集、廿七、え、ま、このへ、さ、終、うて、世
よめ、で、たく、せ、さ、せ、む、た、く、今、ま、て、廿、餘、身、あり、古、へ、の、今、の、古、き、新、き
か、え、ん、と、ど、の、へ、さ、勢、給、て、を、よ、め、て、た、う、せ、さ、せ、む、古の今のおと云え、
又古きお新きお云
く、も、た、る、を、も、つ、い、で、に、考、ぶ、べ
く、これ、も、あ、ま、例、う、て、な、り、

○よのほひののとや、など云へると、異う、ハ、う、ね、ど、少、しか、な、れ、る、や、う、ホ
も、思、え、る、ハ、俗、云、ハ、殊、小、多、し、書、籍、の、お、く、そ、の、持、ぬ、の、名、を、忘

幸とそりちくおぼしきねあべしなど

○のや

△万八九五月之花橋乎為君を仙覺本にサツキノヤとよめるハ傳へ
 有て成べし其をバさ月の花橋と四字句に訓む也ハなりくち一
 うらまど、さて此のやハやの終小出と有(きりのうとよふ由有、ハニ
 くり分合せ考べし、

○万葉に

妹が加ありさなどいへるハ解の流乃下ちれどがく文とる
 △新云たぐらぐと文らるハたを君が賢由己が若しはなどハ
 こりうこさおの若しは若しはいとハいとハいとて君己母あ妹のたぐ
 ひハがとけ、よけのきりさ、ハのきりさとやうに、氷柱のこと氷柱

の抱ハのとのこうけてがとハ文りぬうやとよふ人けりつれど然局
 りてもそけられむ人のけりち親のけりさとハ云べくそれを人か
 おやがとハ云がとぞ思てる、さてこの妹が加ありはなどをハ万葉
 にとあれはとて、たぐ古風辞と云條ののそたくべき詞づひある
 とハ云まどきなり、

○ハ云と仰るのこやうにして、今一条物まぶく思てるのあり、

古今素に、志がのひこえよ女のおほくあつりなる、伊勢物語ハちる

奇に、愛も人の心まぬたりり、塗筆本なすぬ、ハ人いとあるなり、是ら考ふべき

なり、紫式部集小、ぬたりやりあは月のいつつとていつの巻のちへる
 法ゆと有など、え彌集、ハ詞に、人あふ友、あひて、ハ有
 て、奇、石とあり、人のあふ時は、ハくちられどこのの

え校本ヲて
たひかり

○がなれさのが

△がなハがとちまきさるなればかく云ひてハいうまぞや買也さて
このががまのーがととがとのへハ活雜三編に詳説せり

三九

○切るや

△きろくやハまべて截断言をうらる定りたり、此やと全く意も同
しよて、連躰言或ハ躰語を交る時ハ、此やをうへてかと云定りたり、
又也やを^いぬる^うい^つやを^いつ^るか、と云つる如き例知ぬべし、神語を
交るた

前の例がえ
のたふかり さて用云と用云との中、ハさまる時ハ、連用云を交ること

やもかも其つづけさまハ同くて、かハ右くきこえやハやく後めきそ

又也、一概も然らざめれども、あつ別る、たつへハ又やと

がめぬ、いき^うち^{らん}の類の如し、このへ、此四卷十二
右のり、又け合考 さて爰に切る

やの例とちて引る所の中、古十四、あつる麻ぞたう、形をみる

べ、おの^がま^むせ^のむ^とち^びや^{より}、むち^しれ^名の^とち^ハき^く

連射を交るやうなり、截断を交るやあり、連用を受
るやあり、あること、略圖を左右中と按しを曉了せよ、

十右

○後 かけてご小言が身許うへと。思ひきや。あんなまゝの花を足すとハ

△坊オ二句のとハ後撰今本りくホの訛ハ非る手、
り一訛なるハ爰ニ出
も手の存るなり

で、こまハいり小言やせ
四と云小及まじきなり

十右細

○件のまゝとのやえハ二つの格にて。初学の筆此の如く云

△げ小爰なる誨へこそよくせよとされど撰云は、人のあゝるホ云
らうくれぬハなせぢやい、ハハあゝるぬハなせぢやい、思ハ
ん方云云ハあゝるぬハなせぢやい、たそうれホ云ハあゝるぬをなせ
ぢやぞ、道あゝる云ハあゝるぬハなせぢやぞ、とやうに誤し入るこハ、い
よいよゆてやまうるべきやうなり、古今春なる、あゝるぬハ云ハさうぞ

月老

あゝるぬハなせぢやぞと志てみべきなど、撰少う

○後 於 十九 了すゝきぬ人の中ホは志をなすらん人乃中にすつやえ

△上 女心書二
下より分 小云へる如く、やうとの大分け定り、やハきこく云を交、加ハ

連く云をうく、やえとめえとのあまも全く同ド、然小爰に引奇の

まろ、やえハ、いさ、う路ハ志して有さるハまろ、信つ、のつ、ハきこく、と、は、

くとの二の活用をかぬるなれば、まろ、やえ、な、まろ、

然るを奇文のそとて、こハ截断言にて用ふるの、爰ハ連射云小

て用ふるの、と云とハおのづから小もあゝるべけれど、をりくハ見ら即

ちにハ知まが、き者、今坊後於九の、まろ、やえ、な、まろ、

方よてつらへるの、と云と、やえと云へるよて知べきなり、え、連射言

△げふよくさしせる訓へたり、但し志うらら中（まが）と免ふ引て出
 らせる布る（ま）や（ま）よ（ま）紙へくえれどさる人もなき（ま）、（ま）は（ま）小りとお
 されいくよ（ま）紙布る（ま）ま（ま）きん人のきつ（ま）も（ま）せぬ（ま）、（ま）此一首など
 ハ（ま）やを（ま）に（ま）志てころころ処かたりハ（ま）なりれど、志うらら時ハ
 をりりの人もなきハ人のなきと有べしといたまほく（ま）、（ま）きん
 人のきつ（ま）も（ま）せぬ（ま）のせぬハ人の乃のれう（ま）、まらなりと云べきん地
 を、是らハがたるとふもいらねど、かくまうても云ふハ、たゞ初学の
 ためにさ（ま）めてふをそのころえとなるべしと思ひ、又詞の玉結
 をらんハ、おむれ（ま）とむ（ま）ぐ（ま）きん今少くころろとむめせころべき、（ま）ぐ
 きともなりなんと思へバぞか（ま）、（ま）但し上よいく（ま）何まどいへる下ハ普通ハく（ま）と云てや
 とハをさくいまぬ例なるを忘れてハたなまぬぞ

十七七

△やぞ（ま）ころ（ま）なるものついでにいそん、阿弥陀佛と十夢林へてまこ
 ろまん、おき（ま）睡（ま）る（ま）ありもやぞせん（ま）、（ま）和語灯録五
 二十ハ丁出、とある歌のぞん、
 ちの写誤などよや、考ふべし、

十八右

○恙（ま）感（ま）海（ま）ありかいぬる氣を又もあづ乃（ま）鳴（ま）き（ま）あ（ま）お（ま）き（ま）こ（ま）ゆ（ま）ん（ま）や（ま）ぞ（ま）
 △て（ま）よ（ま）を（ま）そのて（ま）ハ（ま）關（ま）く（ま）ぬ（ま）な（ま）れど、その序に云、此がハ一本に、た（ま）い（ま）お
 くかけをさつるか那（ま）鳴（ま）き（ま）云（ま）と有、頼（ま）ふ（ま）が（ま）の（ま）り（ま）を（ま）つ（ま）う（ま）さ（ま）紙（ま）を（ま）ま（ま）ら（ま）う
 でくた（ま）た（ま）ま（ま）の（ま）人（ま）ハ（ま）、（ま）板（ま）か（ま）り（ま）を（ま）ら（ま）ん（ま）、と有（ま）より（ま）ころに、此奇（ま）を（ま）此
 一本のか（ま）さ（ま）よ（ま）く（ま）き（ま）こ（ま）ゆ（ま）る（ま）よ（ま）や（ま）、（ま）辭（ま）ふ（ま）つ（ま）ふ（ま）に（ま）ま（ま）名（ま）を（ま）く（ま）け（ま）ら（ま）例
 て、古今の視ひつらなど有あり、

十九左

○あ（ま）ら（ま）川の（ま）ぬ（ま）れ（ま）の（ま）いと（ま）又（ま）ま（ま）か（ま）し（ま）れ（ま）ど（ま）み（ま）づ（ま）り（ま）に（ま）人（ま）を（ま）よ（ま）せ（ま）お（ま）を（ま）や（ま）
 △是等の例ハ一別に○を（ま）や（ま）と標して、さる奇どもをバ引証した

のやのやハ軽カくそへたさうそのりぞ要トしてハあるべよりてのれ
 部に出せるもことよりなれど志ろかろく云つるやのかこをゆそ
 やの終へと思えろハさうやのりの乃下に限らぬことなえたれ
 かなう、斯く云ふハ於邊ナ我レそやえぬ人らうるやまひをさあ
 めむろでハやむろりなり」と有るこそやハや中ハひききこにか
 くるハたごこそようなるを、そそに軽くやのりをそへたるも
 のときこえ、又雅ヤや人ノなぞやなど云つる類も、皆誰ニと云ひあぞと
 云つるはやを軽ク添フる例ときこゆればなり、されバかろく添フや
 など云ひて、のやのなぞやこそや云運をやの一の例と擧ナん方きこ
 えやききよハいづづばや、

○二つのや古序ナふをはルさくやこのむ云いぬひけいとおわし
 △こハ用言より躰言へ連くつひびごハさみてあやなまふて御ち
 ぬむ、矮くも堆などなれば、仏足石奇にいうなるや人よいませう
 いたの上を土とみみち跡送けらんとあるなごも此類トそい
 うある。人ハ云いてぞおもハる、さて新三木のがはるあひつなく
 や又月やミ林有この心ホとぎを玉六何とをなき未抄外
 の書をれルかまむやづづり人を位りをこまらのやを上あると内ド
 しまがいういひぬるハまりと有ハつらく此二背をこる小
 是ハ上なると内ドとハ云ふままく彼此四葉の初
 ぶやと云つるつに入べきならんと思えるづうハかまむやづづり

ハハ又又ぬぬるるううとハ云へど又又ぬぬるるやとハハ決決めていままれれぶぶるるなり、ああののややと
 ううとききええややううにに分分ままききてて有有ハ其其ややううとて、詞詞ののききんんれれてて問問ううるる格格のの言言
 なららややううななりりと知知べべ、連連躰躰をを受受るるも其其ややううににてて詞詞ののききるる、小小非非
 るハ、落るやや花花ののもも落落るる、花花のの凡凡互互ひひ通通ををせせいいええるるなり、落るれ
 どもやと云へハ拙拙くなるる処処あり、又又ううと云へハああががややううななるる、落るききここゆゆるるな、
 それハ實實によくく心心をを用用みみるるべききなり、さて又已已然然をを受受てて、それ
 をを受受るる時時ののも、そのの言言をを入入るるをを、なくあそそののををりりののも、やうういいつつここ小
 もいいちちももうう、右にに引引るる万万二二のの念念ハハ方方・念念香香毛毛のの如如し、彼心心がが深深く
 そそめてて、をりりれれうう、凡ををりりれれをを、凡云云へく、それをををりりれれやや、凡
 ををりりれれババやや、凡云云べききたたららひひ、言ををここめめてて考考へらべべ、初めめ初初めめ詞

を受受ててののややりりハハ右右にに云云ふふ如如くく、さよようう又又ぬぬるる、今うう笑笑ららんんななららんん
 云云ひひ教教と云云ふふ皆皆初初めめ詞詞なりなりといいちち志志ろろくく、きぬぬととうういいちち人人など
 ののもも、活指指小小具具、云へら如如くく、我云云と云云中中にに入入へきかかるるをを、是をを今今ややりりん
 をを月月のの約約、花ととやや、こららんん白白君君のの、よややくくききるるやや、まどどるるななららん
 ああまませせみみべべ、然ままどどもも其其奇奇、こにによよりりてて、必ううと云云ててよよききとと必必や
 と云云がが巧巧ななるるととののけけぢぢめめああるるととハハうう、まちちももままじじききととぞぞかかし、
 ○古ハハ科科結結おおととのの心心乃乃ききるる、小人人のの志志ろろくく、こががああひひ、凡ううを
 △凡ハハ古古二十十、凡れれどど十三三、凡ののをを小小おおくく初初めめののと云云へらるる次
 にに出出るる、凡其其ををハハ墨墨減減のの奇奇にに出出てて、凡其其ををおおととのの減減の
 と有有、即ちち以以玉玉緒緒以以凡凡、古墨墨減減とと奉奉たりり、凡そそここハハああひひめ

や。と有、今爰に引るハ、あひ免う。とあれど、あれも古今集のハ
十三巻に出るも二十巻の
のちく墨減よりたるも、
ともに「あひめや」とのこある本有て、それよ
リんとあひハむがこころえ小や、

○が小

△坎が小がひハ、こに引る者。が小^ハなどこそれハ、連群云、
くら辞なるを、
又ハ截断云を受る辞なり

其おもハる、それは七巻^三小引る、^ハを云、^ハがひつぐ。がひ^ハ秋田

から云、^ハおもおきぬ。がひ^ハなどこそれ知るべきを、又そこに引る、^ハ

がひ^ハなどこそれれば、^ハ連群云を云、^ハ古くよりのことなりけ

り、されば、^ハがひがひハ、連群詞も、^ハ成る詞も、^ハ附著する辞なり

卅三右
り卅四

とあひ免むべきなり、^ハをバ古今已後ハつづく詞小のこつけて云小
定まる、^ハあひべき、^ハハ、^ハじ、^ハさ、^ハづ、^ハぎ、^ハの、^ハ自らにを、^ハく、^ハえ、^ハを
ら、^ハハ、^ハぬ、^ハに、^ハこ、^ハそ、^ハあ、^ハれ、^ハの、^ハ万、^ハなる、^ハ声、^ハの、^ハく、^ハが、^ハ小、^ハま、^ハと、^ハに、^ハ働、^ハひ、^ハて、^ハ今、^ハも
用ひたま、^ハと、^ハを、^ハな、^ハて、^ハよ、^ハと、^ハ有、^ハべき、^ハ雑、^ハ話、^ハ四、^ハ編、^ハ小、

△何の下、^ハお、^ハく、^ハか、^ハが、^ハ笑、^ハの、^ハま、^ハ處、^ハの、^ハこ、^ハろ、^ハえ、^ハた、^ハど、^ハい、^ハう、^ハ小、^ハも、^ハよ、^ハ辨、^ハへ、^ハ並
べき、^ハと、^ハなり、^ハ二、^ハ巻、^ハ十三

△初、^ハう、^ハぬ、^ハえ、^ハよ、^ハそ、^ハ孩、^ハぶ、^ハ何、^ハの、^ハ處、^ハ小、^ハ方、^ハり、^ハを、^ハ思、^ハひ、^ハ出、^ハれ、^ハバ、^ハ教、^ハを、^ハう、^ハち、^ハ西、^ハ一

う、^ハふ、^ハく、^ハ月、^ハを、^ハえ、^ハて、^ハい、^ハく、^ハま、^ハり、^ハう、^ハは、^ハ南、^ハ无、^ハ阿、^ハ弥、^ハ陀、^ハ佛、^ハこ、^ハ八、^ハ拾、^ハ五、^ハ小、^ハえ、^ハ
也、^ハ後、^ハ成、^ハ々、^ハの、^ハなり、

○切る、^ハ何

△此類、^ハひ、^ハよ、^ハて、^ハな、^ハぞ、^ハや、^ハし、^ハや、^ハり、^ハド、^ハそ、^ハつ、^ハり、^ハて、^ハ切、^ハま、^ハた、^ハる、^ハも、^ハ有、^ハ源、^ハ順、^ハ集、^ハ引、^ハち

卅六右

卅五右

りひきん「まどいづれへも通ぢる秋が小うくにふる命のふる
 一葉」あふ一ころを「たど云ひ、あふ一う人をおりひ初らん」まど
 の一ハ、丑書 廿二より廿七 にいたゆるやまめの「」の二つと思へる。されど
 古今のなふ一う人を思ひ初らんも、友刻葉の一古本「は、なはふ小
 人をとひるなり、狩考べ」 近古の俗書どもに、なうと云ふ者、何う生
 なり、然「」の「」の「」に「」も、り、件
 りの外「」葉「」葉
 などの類ぞといふべき。

○ちぞと

△「なハ何字の意、ぞハそくて云こそ、やぞ。なども曰例なめん、され
 ばまぞもなふぞも同じ、又いっよぞ。ハぞ。なぞ。など云へるも皆同じを
 るべし、その中たまぞハ、色葉奇し、わかよたれづつねならむい云

へる如く、なうハ、あまきハ、まえ、はて、くくる、処ハ、まどて、催うと云例と
 おもたるれど、彼、色葉奇り、古き世の物なれば、そのまこそ、ま古
 き証とまべし、斯き、はて、なれば、新古今「」たれぞ。このまわの、核系
 あう、なう、にん、の、核、の、赤、を、ぬ、ぬ、ら、と、ら、即、この例なり、狩古くハ
 万十四 廿二 多禮曾、許能やの、戸、た、そ、あ、ら、ふ、な、み、よ、わ、赤、世、を、や、や、そ、
 い、ま、ふ、は、戸、を、た、ど、こ、え、り、狩て、廿五
 ありまべし、

○それいぬが

△「それ」をたとの「云へるハを、まど、こ、え、ぬ、核、ハ、れ、ど、我、ハ、り、と、已、其、
 誰 誰 誰、も、た、と、云、ふ、こ、そ、り、と、を
 誰、も、た、と、云、ふ、こ、そ、り、と、を
 るべし、れ、と、を、ま、ど、こ、え、ぬ、核、ハ、れ、ど、我、ハ、り、と、已、其、
 るべし、れ、と、を、ま、ど、こ、え、ぬ、核、ハ、れ、ど、我、ハ、り、と、已、其、

あふ〜多爾加毛余良牟のみやぶと」ところ多爾ハ誰かなりと傳
四十一冊ハ小釈せるをこれバ、ナホと思定られぬかし、
因一云、為、ハトを
仏足跡哥など
ナリえんたり、
ふこと云へるも古ハ

○祢がみさのいふふしを

△げ小祢がみさのなめれど、後に引たる三首のいふふしをハ
如何してと心にうくるのこゝで、祢ふとまでハいまでもきこゆ
るを、狩預意と云てよからんとハ、順集よて知へきなり、順集小、二
月をいむ万のころハ、ハクハ、花をもつま、花の考を神につみ
〜もはみもあそふ、是を一本ハ、三月をまつみのころと歌、
いふふしを花をつま〜花の考を神とあらうはみもこそいふと

有て、さてハ此いふふしをハ、ことハ預意のとハきこえざめれど、ハ
歌ハ一本の方堂〜かゞゞ、奇ハ狩板本のまよふ人とあふさハ、
くふしをハ何トブレテの意なり、さて下、小出る、祢がみさのいふ
云ハ格踏び〜かゞゞとあら、げふさやうと思さるを、此い、
小してハ踏びぬちもんなるが、ハざらんの約りなれば、つま、
も同例と云べきよや、後拾春上、吾ありて、なふさやうハ山里にい、
小してくま表の事つとん、ハドノヤウニシテなり

○いくてみ辞のつうひざぬこて。云

△この要論とハ、いられど、この序に云らん、斯くてふと云、を
バ、奇たうして文詞小用へるハ、堂〜むと、いふ、松屋の文のあら〜

ハ玉を教に
依てコヤ、小よる時ハそのコのコよコうコぬコにコ似コたり、玉のも世の詞を不
る糸も有つぎに引べしといふ、但し文のちるべし、そのまま、唯依りもも依る
まま其自説もあまぬやうなり、但し文のちるべし、そのまま、唯依りもも依る
べしといふ、中昔の文詞ハ、竹取物語ハ、かくや娘てふたねを入る
と者をもこし、古き所も、者をてりとよむなどなるこの
てふ、かうもあれをまれと云など、あらひもこしにべきとなり、これら
のこと
えまとて又別に三べけれど、初にことこれるや、絡り別くとらる玉結コこえる
造語のことなれば、聊かる玉もいえんとらるままにうらまて云ふたり、柳ののてり或
ハちなかどハ、歌詞よて文詞ハ、非るよ、文のちるべしにこえたりとハ、玉のちるべしハ、出
たまを其処ハ、但し、あらるも、あまぬやうなり、某と定まれるお有て、おおちと
て云ふ、この例外といふ
此このこと、ハ、き下たりし、

玉緒録分 爾卷終

